を、笑話はもとより古風な鳥獣草木譚までを引きくるめて、私は之を派生説話、もしくは不完形昔話とでも謂はうかと思つて居る。（「昔話覚書」（『昔話研究』五・六号））

柳田の文章は晦渋な面もあるが、ここでは、「神話」「神聖なる母胎」に基づく本格昔話を「或非凡なる一人の伝記、もしくは或一門の鼻祖の由緒を、説くかと思はれる形を具へたもの」と述べていることに異論はないであろう。

四、〈口承〉の〈いまここ〉に求められているもの

さて、「研究者というメディア」は本誌の特集の一つに組まれているが、先にも述べたように、いまなぜそれが問題なのか、よくわからない。確かに、特集の言挙げを読めば、この原稿の載せられる理由がぼんやりとながらわかる。ただ、斜陽の民俗学、伝承の途絶えようとしている昔話の現在において、もっと社会に開かれた活性した学問でなければならないはずなのに、時事ネタ風に研究者の倫理性をチェックするようなネガティブな発想でいいのだろうかと考えてしまう。最後に、高木のひそみに倣って、私の〈口承〉の〈いまここ〉に求められているものを提示してみたい。

実は今までに採集してきたテープの耐用年数が過ぎてしまい、今まさに消滅しかけようとしている。貴重な話者の時間を割いて聞かせてもらった昔話の保存をどうするか、早急に考えなければならない問題である。これは研究者の手元だけでなく、大学の研究会や市町村史の調査などにおいても膨大な数のテープが残されているはずである。個人や学会でできるような事業ではないので、公的な機関や、それに代わるような援助者が必要である。昔話が消えようとする時代に研究に関わった者の責任としてなんとかならないものだろうか。

（はなべ・ひでお）

小特集・研究者というメディア

「研究者というメディア」を読んで

常光　徹

高木氏の「研究者というメディア」（『口承文藝研究』第二十三号）を拝読していろいろと教えられることが多かった。研究者は、つねにメディアとの係わりのなかに組み込まれていることを自覚しつつ行動すべきであるとの指摘は、ともすれば多忙な日々に紛れて、無自覚なまま埋没してしまいがちな現実に対する警鐘として傾聴すべき言葉だと思う。

文中では、私が子ども向けに書いた『学校の怪談』（全九巻、講談社）も取り上げられている。今、振り返ってみて、高木氏が実践されているような「いかにメディアと係わっているのか、係わるべき

か」という問いをたえず自らに問いかけ「社会に絶妙に立ち回る」姿勢には、多々欠けていた面があったことは認めざるを得ない。しかし、高木氏が拙著と日本民話の会学校の怪談編集委員会編『学校の怪談』シリーズ（ポプラ社）について、「『恐ろしい』『怖い』『残酷』に焦点を合わせてヒットした」と一言で断定しているのは誤解を招く。怪談集だから怖い話を素材に用いるのは当然だが、ただ恐怖や残酷に焦点をあてて書いたものではない。しかも、恐ろしい・残酷だからヒットしたかどうかの根拠はまったく示されていない。短いストーリーの怪談話としてなるべく落のある話題をとりあげて紹介し、あるいは再話してきたつもりの私としては残念であるだけでなく、本文章の文脈のなかでは読者を特定の意図に誘導する危険をはらんでいる。

高木氏はこの文章の執筆の段階で『学校の怪談』が書店に並んでいるのは見かけたそうだが、実際に読んだのだろうか、内容を総合的に検討したうえで発言しているのだろうか。私には、そうした手続きを抜きに『学校の怪談』にただ恐怖・残酷のレッテルを張ろうとしているようにしか見えない。何の考証もなしに「垂れ流した話の影響」などという発言は、何度も推敲と検討をかさねてきた十数名の執筆者に対する研究者の傲慢な態度の表れである。学会の機関誌の編集者として責任ある立場の高木氏が、自らの書いたものを巻頭にすえることの重さ、まさにメディアに係わる研究者の責任を感じてほしい。

高木氏は、日本口承文芸学会の大会が遠野市で開催されたころから、メディアに係わる責任を自覚し、遠野市と係わることを避けたという。遠野に係わる研究者に向かって「私は彼らに問うてみたい。あなたは研究者というメディアとして、どのように『遠野市物語』と係わりあったのか、係わりあっているのか。そうして、係わりあうことで生成する研究者への意味づけをどのように引き受けているのか、と」と述べている。大切な指摘だとは思うが、私の率直な意見を言わせてもらえば、他人がどう責任をとっているのかを声高に問う以前に、社会のなかに繰り込まれているメディアとしての研究者の在り方に、早い時期から自覚的な高木氏自身の「不断に自覚し覚悟した上で」の取り組みについて、具体的に論じるべきではなかったか、と思う。

（つねみつ・とおる／国立歴史民俗博物館）